はじまりは朝

川西蘭

KAWANISHI RAN

河出書房新社

はじまりは朝

KAWANISHI Ran

川西蘭

はじまりは朝　©1982
著者　川西蘭
一九八一年十二月二十五日　初版印刷
一九八二年　一月　八　日　初版発行
発行者　清水勝
株式会社河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三二-二
電話（〇三）四〇四-一二〇一（営業）
（〇三）四〇四-八六一一（編集）
振替東京〇-一〇八〇二
印刷・暁印刷　製本・中央精版
定価はカバー・帯に表示してあります
乱丁・落丁本はおとりかえいたします
Printed in Japan

はじまりは朝

——*Happy days*
are here
again !

カバー写真　築地　仁
装　丁　菊地信義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ねえ、もう起きなさいよ」
肩をつかんで乱暴に揺する。髪の毛が鼻に触れる。口をつぼめ、あごにしわを寄せた真理はこぶしで軽く和人の胸を叩いた。
「まだ眠い」
かすれ声で和人は応える。昨夜飲んだウィスキーがまだ内臓にからまっている。深呼吸をすると、ウィスキーの匂いがしそうだった。真理はちょっと上を向いているけれど低くはない鼻に指先を当てて和人が起きるのを待っている。
「もうちょっと寝ていたい」
真理の腰に触れようとした和人の右手が空を切る。体をよじったまま真理は首を横にふって見せた。

「煙草が吸いたいな」
うーんと背を伸ばし、一気に上体を起こした。カーテンを引くと朝の陽射しが部屋に射し込む。小刻みに動く木の葉が陽光を受けてきらめく。弱い風が吹いている。
「煙草が吸いたいんだけど」
肩の下まで伸びた真理の長い髪に向かって和人は言った。
「構いませんか」
「どうぞ、御勝手に」
立ち上がった真理は髪の毛を耳にかけながら和人を見下ろした。一本一本触れ合って軽い音をたてるような髪の毛を光が滑っていく。
「でも、その前に顔を洗って欲しい」
「うん」
真理の細い体を包むぶかぶかのオーバーオールに目をやってうなずく。色が脱けるほど洗われてくたくたになったオーバーオールは着心地は良いのだろうけれど、彼女の体の線を完全に隠してしまう。ゴテゴテ着飾ったり、ビッチリお化粧するのは似合わないのよ、と真理は言う。そうですか、と和人は応えておく。ゴテゴテやビッチリ

を見たいという気もしなくはない。
和人が服を着替えている間に真理はコーヒーを淹れ始める。丸めたパジャマを押し入れに放り込み、和人は洗面所へ入った。鏡に映る青白い自分の顔におはようを言って、洗顔セッケンを使わずに水だけで顔を洗った。
「タオルは」
大声を出したけれど、返事がない。顔に水滴をつけたまま洗面所を出た。
「ねえ、タオル」
流しに顔を突っ込むようにして真理が苦しんでいる。肩をすくめ口を手で覆う。のどの奥から押し殺したような声を出す。ポカンとしている和人に気付いて顔を上げた。目に涙が浮かんでいる。
「悪い物でも食べたの？」
「……」
和人から目をそらし、真理は蛇口をひねって勢いよく水を出す。音をたててうがいを始めた。タオル、と言いかけて思い直した和人は洋服ダンスの引き出しから新しいタオルを引っ張り出した。

「病院に行って診て貰えよ」
「平気よ」
ふり返った真理はかすかに微笑んで見せた。唇に手の甲を押し当て、軽く深呼吸をする。目が少し充血している。
「ホントに大丈夫なのか？」
和人は椅子に腰を下ろし、煙草に火をつける。薄い煙が真理の鼻先をかすめて、換気扇に吸い込まれて行った。クリーム色の天井が煙草のヤニで汚れるのはたまらなく嫌なの、と彼女はよく言う。あたしの部屋だったら、絶対に吸わせないのに……。だから、というわけではないけれど、和人は電車を使えば二十分とかからない真理の部屋に入ったことがなかった。いつもドアの前で丁重に追い払われるから、強引に入り込もうという気さえ起こらない。
真理はテーブルの上に固めに焼いた目玉焼きとサラダを並べた。サーバーからカップにコーヒーを注ぎ、洗ったばかりの灰皿に和人が灰を落とすのを見て半開きの口からかすかなため息をもらした。
灰皿で煙草を揉み消し、和人はバターを塗ったトーストをかじった。狐色の粉が皿

にばらばらと落ちる。
目玉焼きにケチャップをかけた。
真理はレタスをつまみ、コーヒーをなめるようにゆっくりと飲む。
「トースト、もう一枚食べる？」
「いや、いらない。……全然食べないのか」
「うん」
「どうして、太るからか？」
ちょっと眉をしかめて真理は応える。
「そんな低次元の話じゃないわ」
「低次元、かねぇ」
「ヒトは必要なものを必要なだけ食べていればいいの。余計に食べるから太ったり病気になったりするのよ。だから、あたしは食欲がない時には食べないの」
「病気になるよ、逆に」
和人は人差し指と親指で楽々とつかめる真理の腕に目を向ける。肌は白くつややかなのに肉は本当に必要なだけしかついていない。彼女は動物性の食物をほとんど口に

しない。自然のバランスを崩してまで特定の動物を増やしたりすると、結局ヒトは死滅してしまうのよ。今生きているもの全てが地球を共有していることに気付いてないの？　真理に捲し立てられて和人は口を閉じ目を伏せる。真理は何を食べてもおいしくないんだろうな……。

「体、丈夫だから」

それに、と口の右端を引きつらせるようにして真理は皮肉な笑顔をつくった。

「和人くんみたいに下腹がたるんだら、自殺するしかないじゃない」

「オレだってたるんでないよ」

「そう？」

汚れた皿を重ねながら真理は言った。右手の指を伸ばし、爪を見つめる。手の甲を軽くこすり合わせ、よいしょと声をかけて立ち上がった。シャツの袖をまくり、鼻歌を歌いながら皿を洗う。細くとがった肘の骨を見て、少し太った方がいいのに、と和人は思う。胸を手で覆おうとしても、あばら骨を指に感じてすぐに力を抜いてしまう。こわれ物を扱うようにしか真理を抱くことはできない。

「もちろん、そうだよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

コーヒーカップを両手に持って和人は彼女の横に立った。流し台にカップを置き、髪で隠れて見えない真理の顔をのぞき込む。手を伸ばし、彼女の肩に触れた。

「何？」

真剣な顔で真理は泡だらけの皿をスポンジでごしごしこすり続ける。和人の手が首から頬に移る。

「何よ」

鬱陶しそうに顔をそむけた。

「ベタベタしないでよ」

口が真理の口で塞がれた。柔らかい感触が体の中の熱い衝動を呼び起こす。力をこめて抱こうとしたとたんに彼女は離れていた。

「……お皿拭いておいてね」

タオルで手を拭いながら真理は部屋に入り、化粧バッグを持って洗面所に消えた。和人の部屋には鏡がない。トイレとバスがくっついた洗面所の鏡で用は足りている。ただ、化粧をするには不便だけれど、彼自身は化粧をしないから平気だった。

拭き終った皿を食器棚に入れて、和人は部屋に戻りFMを流す。慌しい朝の気配を

告げるアナウンサーの声が聞こえて来る。夏休み明けの試験が始まっていた。一日に一科目か二科目、約二週間にわたって試験が行なわれる。

和人は講義ノートと参考書をカバンに入れ、試験のポイントをもう一度頭の中でくり返してみた。ジェヴォンズの交換方程式、ベーム・バヴェルクの利子理論、ウィーザーの費用法則、メンガーの高次財について……。

「ねぇ、ここ掃除してるの？」

洗面所から真理が大声で訊く。チューネンの自然賃金論があっという間に姿を消した。

「してるよ、時々」

化粧を終えた真理がぶつぶつ愚痴りながら部屋に入ってくる。髪をとかし薄い化粧をした彼女はテープラックからカセットを取り出し、FM放送をテープ演奏に切り換えた。シンセサイザーが奇怪なインド音楽とも邦楽ともポップスとも判断のつかない曲を奏で始める。

カーペットの上に坐った真理は足を組み、両手を胸の前で合わせ目を閉じる。背筋を伸ばし、ベッドに腰を下ろして眺めている和人にさえ分るほどピタッと型にはまる

と、彼女は動きを止める。

朝（時には夜も）真理はヨガを数ポーズ、およそ人間が考え出したとは思えない格好を真剣にしかも楽々とくり返した。

「和人くん、時間あるの？」

大きな息を吐き、真理は目を開ける。首を振って足を伸ばす。よいしょ、とかけ声をかけて和人の横に腰を下ろした。

「あるよ。……十時からだから」

「試験、いつまで？」

「明日二つ、明後日一つ、で終り」

「じゃ、明後日来る」

「……？」

「いいでしょう？」

こつんと肩を和人の胸に当てる。柔らかな髪が少し乱れた。

「いい、よ。……でも、どうして」

「うん、ちょっとね」

いいでしょう、と耳元に口を近付けて訊く。細い指で髪の毛をつまんだ。
「話があるのよ、ゆっくりと腰を据えて聞いて貰いたいわけ。理解した？」
「した」
「結構」
こぶしで軽く和人の背中を叩いて立ち上がり、部屋の隅に置いてあった布製の到底綺麗だとは言えないカバンを肩に掛けた。型の崩れたカバンに化粧バッグを入れて和人の前に立った。
「駅まで一緒に行く？」
「まだ時間があるんだ。……大学へ行くの？」
「ううん、あたしの方はもう終ったから」
腕を組んだ真理は二、三度うなずく。
「明後日、絶対にいてよ」
「ああ、いる」
結構、と呟いて彼女は大股に歩き始める。台所を抜け玄関でサンダルをはいたあと、思い出したように大声を出した。

「ここ、ゴキブリ出る？」
「出ない」
和人も大声で応える。
「ゴキブリ取り、ある？」
「ない」
ドアを開ける音が響く。
「ゴキブリがいるのか？」
「いないよ」
叫ぶように言ってドアを閉めた。玄関まで出て靴や下駄を動かしてみたけれど、ゴキブリなんて何処にもいなかった。コンクリートの土間に砂と一緒に小さな紙切れや髪の毛が落ちている。細くて長いのは真理の髪の毛だ。

古くがっしりとした石の階段を下りて、薄暗い校舎から強い陽射しの中へ出た。眠気を誘う歌声が何処からか聞こえて来る。学生ラウンジの前で立ち話をしている女子学生の腕時計が強い光を放つ。風が木の葉を揺らした。

和人は白いペンキがはげかかり木の地が見えているベンチに腰を下ろす。薄汚れた綿のような雲に覆われた空を眺めながら、あくびをかみ殺した。

——コネがないんだ。大変ですよ。

——うちの教授、何もしてくれないから辛いよ。マメに世話をしてくれると有難いんだけど……。

——どこでもいいから就職しよう。

——成績の良いお前がそういうこと言うの？

——何の何の、強力なコネがある人にはかないませぬ。

——大変だよなァ、ホント。

斜め後ろのベンチで話していた二人連れが立ち上がった。眼鏡をかけた背の高い男が、うーんと大きな伸びをした。

——メシ食いに行こう。

ああ、行こう、と紙コップでコーラを飲んでいた太めの男がうなずき、先にたって歩き出す。オーデコロンの強い匂いが彼らの立ち去ったあとに残った。

「和人」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com